

## 高校生はどんな思いで現代日本社会を生きているのか

千葉県公立高校教諭 前田 恒久

千葉の公立高校に勤めている前田と申します。私はこの学校の前に2つの大変な高校を経験しています。特に2校目の高校は県でも退学者の多い学校で、ピーク時は卒業するまでに半分以上やめていく。当時1990年代後半で半分以上やめていくのは、多分日本一かと思えます。

そういう高校が生まれるのは偏差値で超薄切スライスになっていること、つまり、巨大学区の中から困難を抱えた子ばかりが集中するからです。この偏差値の輪切りを裏から読めば、親の経済力の格差です。偏差値が低いほど親の経済力や家庭の困難、不幸が集中します。現在勤務している高校は前任校と比べて問題が緩和されて出てきています。

### (1) 生徒の思いをつかむ

これから君たちが教えることになる高校生も、人には言えない苦労を実は背負って生きている。それは今という時代が強いる苦労です。友達と会う時には明るく元気、あるいはテンションを高くしているかもしれない。だけど、家に帰れば、あるいは独りになった時、カミソリを持ってじっと手首をにらんでいる。夜寝られない子どもたちです。元気のある子どもたちは外に行く。家に居場所がないからです。だって本来は、夜というのはご飯を食べたり、次の日の準備をしたり、家族と楽しい会話をしたりする時です。でも、そんなことができないから夜、外に出るわけです。外に行けば大人たちは優しいです。女の子が1人飛び出

せば、夜の大人は優しい。でも、それは本当は彼女たちを食べ物にするため、性産業に売り払うためです。あるいは自分が性の対象にするためです。男の子だって夜外に飛び出せば、夜の大人は優しい。なぜなら、こいつは使える、手下にできる、売人にできる、シンナーだ、薬だ、売りさばく売人、だから優しい。学校の不満も、先生たちの不満も、親の不満も全部丁寧に聞いてくれる。だけど、そういう大人の優しさは、子どもたちを食べ物にするための優しさです。

そういう子どもたちが今、どんな思いで生きているのか、というところを今日は話していきたいと思います。一言でいうと、つながりたいのにつなげられない。それからもう1つは、自分を好きになれない。自分に自信を持ってないといってもいいかもしれない。実はつながるとか、自分を肯定できるとかいうのは、人間が生きていく上での土台中の土台です。それは人権とか、権利の主体になるための土台といっている。その土台が壊されている。

なぜ、こんなにつながりたいたのにつなげられないのか。もっと自分に自信を持ちたい。でも持てない。なぜか。その中でどんな思いで生きているのか。

### (2) 「男のジェンダー」の生きにくさの中で

ジェンダーという言葉があります。男女の性差のことですが、肉体的な性差ではなく、社会的・文化的に作られた性差。平たく言う

と、男は男らしく、女は女らしくするべきだ、そういうのが望ましいとか、望ましくないとかを社会が期待してくる。そのような社会的、文化的に作られた男らしさ、女らしさです。この概念は女性解放運動から出てきた考え方ですが、単に男女の不平等や役割分担論だけではなく、男女の特有の考え方・感じ方を説明するのにも効果的です。例えば、高校生の男の世界では「強さ」が要求されます。強い男は格好いい。強さに伴う背の高さや体の大きさ、あるいはスポーツができる、けんかが強いことが男の世界では重視され、序列を作ってしまう。勉強をめぐる敵対的な競争だけではなく、ジェンダーでの競争やその結果としての学校カーストと言われる序列があるのです。

私は政治経済が専門ですが、倫理も教えます。そこでジェンダーの勉強もして、1年間勉強をした後、最後に自己形成史を書かせています。これは何年何月に生まれて何年に入学したとか、そんな「ただのありのまま」を書くのではなく、自分にとって切実だったことを見つめ直すために書く、自分をしっかりさせるために書くというものです。その中で「男のジェンダーの中で生きてきたつらさ」を書いてきた生徒がいました。男の世界はとりわけ進学校ではない学校になるほど、勉強ができなかったことを補い返すように、スポーツができるとか、強いとか、非行に走ればそういう面での強さや幅を利かせられることとか、そういうことがクラス内の序列を作っています。

従って、そこの中での不平等、そして、どれだけ相手を支配し、言うことを聞かせられるかということがある種の強さの証明になる。こういう中で、言うことを聞かされる側がどんなに傷ついているか。例えば、体が貧弱で背が小さく、スポーツも苦手で勉強もできないという男の子が、どんなに自分自身を否定して生きているか、ということです。

次の文章は、ある男子が書いた自己形成史です。

### 「男のジェンダーの中で生きてきたつらさ」 (2005年度男子)

「俺は小・中学校と男のジェンダーの中で生きてきて、とても息苦しさを感じてきた。俺のいた環境では、スポーツができる（特にサッカーがうまい）、けんかが強い（暴力）により、人間関係に序列ができていて、俺は中位にいたが、それでも息苦しさを感じていた。それはなぜか。今、冷静に自分を見つめれば、簡単なことだ。下位になることをいつも恐れていたからだ。中位にいたって、上位の奴らが気に入らなくなれば、すぐにいじめを始める。こんな光景を何度も見てきたし、俺自身体験した。つまり、下位にならないために、上位の奴らに毎日、気をつかわなければならない。この状況はとても嫌だったけど、息苦しさはこれだけが原因ではなかった。きっと、あの時に感じていた息苦しさは、このような状況で上位の奴らの言いなりになっている自分の非力さに息苦しさを感じていたんだろう。これが息苦しさを感じていた最大の原因だ。言いたいことも言えない、言えはいじめられる。いじめを恐れている自分もなぜか嫌だった。これも今思えば、自分のことしか考えていない。本当に、今こうしてあの頃を思い起こすと、一番苦しかったのは、下位にいた人たちだ。毎日のようにいじめられていた。俺の小学校は1クラスしかないので、遊びたくなっても誘われやすく、NOとは口が裂けても言えない。このような状況で下位の人たちは強引に誘われ、遊びという形で、いじめられていた。上位の奴らは、今日もあいつイジる（通常は、ちょっとからかったりすることを指す）かなどと言っていたが、俺にとってはいじめをするにしか聞こえなかった。遊びで一番つらかったのは、上位の奴らが下位の奴らをいじめる。そして、上位の奴は俺に『おまえもやれ!』といじめに加われと言ってくる。俺はすごく嫌だった。

だけど、自分自身がいじめられたくないから俺も加わった。ほんとに自分の非力さにショックと言うか、何か言葉に言い表せないほどの怒りがあり、自分自身をすごく責めた。中学校に入り、いじめはなくなったが、人間関係の序列はなくならなかった。俺は上位の奴らに気を遣っていたし、上位の奴らは俺や下位の奴らを見下していた。

しかし、中学校は他の小学校からの生徒も来るので、友達の輪が広がった。このことが俺の『自分の非力さが悪い』という考えを変えることになる。それは対等に話せる友達が増えたことだ。何も気にせず話せることの喜びはそれはもう最高だった。これこそが本当の友達だ。俺を苦しめるあんな奴ら（上位の奴ら）は、友達なんかじゃない。また、上位の奴らは中学に入っても、相変わらずの態度なので、俺が対等に話せる友達たちも嫌がり始め、俺と同じ息苦しさを覚える人も出てきた。そうした中で、俺の考えが 180 度変わることができたことがあった。それは、上位の奴らに不満を持っている俺の友達が言った愚痴だった。『あいつら（上位の奴ら）が悪いのに、何で俺が悪いみたいな思いをしなきゃなんねんだよ！！』この愚痴を聞いた時、俺は目が覚めた。何かから解放されたような気持ちだった。そうだ、俺が悪いんじゃない、上位の奴らが悪いんだ。見返してやろう、と思ったけど、それはできなかった。でも、俺と同じ思いを抱いていた人とつながりあえたことは、すごく嬉しかった。また、倫理で勉強して、改めて、自分は悪くなんかなかったんだ、ただ自分自身で縛りつけていたんだ、ということが学べて、すごくためになった。ただ、まだ少し後遺症がある。自分自身、自分より上だなと思う人には、ペコペコしたり、自分より下だと勝手に決めつけた人には見下した発言をしたりしていて、自分でも良くないと思っているのだが、反射的に出てしまうことがある。これは直していきたい。あと、小・中学校の頃の俺は、悪いことしている人に『それは悪い』と言えなかつ

た。これも、今後の人生の課題にしていきたい。このように、人に序列をつくらない、悪いことを注意できる人が増えれば、俺みたいに苦しまないで、学校生活を送れる人が増えるので、俺は『そういう人になるんだぞお』と、教えていきたい。（教師になったら）

### （3）底辺へ押しやり孤立させる仕組み

では女はどうか。女の世界、難しいですね。学校生活の中でしばしば起きるのが女の子のトラブルです。女の世界は、男の世界と違う論理があるといわれています。例えば女の子のいじめ。男のいじめとちょっと違う。例えば男は相手が徹底的に弱いということを利用して味わわせる、そして言いなりにさせる。ところが、女の子がもちろん暴力を使わないわけではないのだけれども、女の子のいじめの主流はそうではなく、無視と悪口。それは女の子の世界では、どれだけ皆に好かれる子か、ということが重要になっていることが背景にある。逆に言うと、いかに嫌われ者か、ということを利用して味わわせることが女にとって最もダメージがあることを、いじめる側がよくわかっているから、そうするのです。男の暴力のいじめと比べても、人格に与えるダメージは大きい。それは女にとって存立基盤を攻撃されるからです。女の子はそういうことに傷つき、悩みながら生きている。

このいじめの裏表にあるのが、女の子の仲良くなるなり方です。そのポイントは秘密の共有です。女の子は〇〇君が好き、という秘密を共有します。そしてもう 1 つ、「実は誰誰が嫌い」という秘密です。この秘密をいかに共有するかが、親密さを維持する秘訣なわけです。逆に「なんでここで言うかねー」といった子は「空気が読めない」存在として、周りから引かれてしまうわけです。

どうしたらいいのか。この辺は千葉大学片

岡洋子教授の論文（雑誌『教育』2011年1月号）を読んでみるといいと思います。更に、なぜ、こういうことが起きるのでしょうか。それは女性が社会の中で金や地位や権力に接近しにくい状況がある、それを補うために、女は男を支え、様々な感情を提供し、かわいい女であることが生きるすべとして要請されてしまうという不平等な社会が背景にあるようです。

さて、この様なことと関わって、女子の世界の序列というか、ジェンダーを巡る競争が存在することについてお話しします。男の世界が「強さ」なのに対して、女の世界は「美」を巡る敵対的な競争、それに伴う、「かわいい」とか、「女らしい」とかを巡って、女の世界に敵対的競争と序列ができたりする。例えば、クラスにしずか系・普通系・ギャル系といったグループができる。普段は何でもないが、体育祭でリレーの選手を決める時、リレーの選手を皆やりたがらないので、そういう時にギャルが出て、仕切って、結局、弱い立場の子がリレー選手をやらせられる。力関係に影響するのです。そして、しずか系にとって体育祭までつらい場になったりする。

もう1例紹介します。小学3年のあるクラスのことです。学級崩壊が起きかかりました。その時いじめもあった。学級崩壊の裏にはいじめがあるものです。そして序列がある。その上下は何で決まるかと言うと、小学校3年生ですから1つ目は、何といても勉強ができること。2つ目は、かわいいこと。そして3つ目は、流行を知っている。そして小3ですから、かわいいシールをたくさん持っているとか、かわいい絵が描けるとか、です。

その中でいじめられていた子は一番下位に位置づけられていたのです。なぜならば、かわいいことが重視される世界で、ワカメちゃんカットをしている、流行の服を知っていることが重要な世界で、前日に書道で汚した服をまた次の日に着てくる、学力を巡る敵対的

な競争も有る中で、勉強も苦手だったのです。その子は小学校へ入るまでは元気のいい子で、学校に入るに従ってどんどん萎縮し、中学では自分はしょぼい系だと言うようになってしまいました。実はその子は母子家庭で、お母さんが夜10時、11時に帰ってくるのを、5、6歳のその子が自宅付近の暗い坂道の街灯の下でずっと待っているという生活をしていました。同居していたお婆ちゃんがカットするのでワカメちゃんカット。そしてお母さんも忙しい。子どもは前日着ていた服をそのまま着て学校に行っていたわけです。そういう子がいじめられたりすることがあるのです。その時いじめの中心の子はかわいくて、勉強はトップではないけど、そこそこできる。流行も知っている。そして、その子が「〇〇ちゃんって、超わがままだよね～」と言うと、周りがそれに合わせて排除する。そして、いじめられている子が授業中指名されると「こんな問題もできないの～」と聞こえよがしに言ったりするのです。

そのようなジェンダーを巡る敵対的競争とそれによってできる序列、その中でできた心の傷が社会に出て、新自由主義といわれる格差と貧困、競争と差別、苦しいのは全て自己責任だと押しつけられる世界に引き継がれるわけです。学校や家庭でダメージを受けてきた子たちは、とても自己否定感が強くなっている。先ほどの女の子も、自分をしょぼい系と言う。そして今の効率だけを優先させるような世界で、とても空気の読めないやつとして、いじめを受けるようなケースが多くあります。

例えば今、若い人たちの半分が使い捨て労働の世界に行かされる。その中で例えば新幹線の車内の清掃等をする仕事がある。新幹線が東京駅に着き、お客さんが降りた後、中でぱっと椅子を戻して枕カバーを替えたり、ゴミを掃除する仕事です。あの人たちは、昔は東京駅に新幹線が着いている時間が長かった

ので、もっとゆったりしてた。つまり、少々不器用な人でも一緒に仕事をやれたわけですから、ところが今はどうか。新幹線と飛行機のお客の取り合い競争の中で、新幹線は停車時間がすごく短くなった。ここで不器用な人がいるとチームの迷惑になる。おまえのせいで遅れたじゃないとか、いじめが起きるのです。

こうしてこのような不器用な人はその職場にいられなくなって、更に劣悪な条件のところに行くしかない。このように今の社会は競争がどんどん進行し、新自由主義がもっている非常に過酷な仕組みのなかで、底辺へ底辺へ追い込まれていく状況があるのです。

それだけに子どもたちに今、自分というものに対して自信と安心をもたらすことが、生活指導の非常に重要な課題といっているでしょう。

#### (4) 書くことを通してもう一度生きなおす

さて、どのような経過をたどって安心や自信を奪われていくのか。次に、性非行に走った女の子の例で考えてみましょう。この子は笑顔がかわいらしく、「私、悩まないよー」と言っているような子でした。卒業後、成績などには関係なく、もう一度自分をしっかり見つめ直すために、1万字を超える自己形成史を書いてきました。そのポイントを紹介します。

「母親にとって兄は『よい子』で、私はいつも『お兄ちゃんを見習いなさい』と言われ続けてきた。小・中と勉強が分からなくて、いじめ、そして、先生との対立などで呼び出されて、私は1人で泣いた。『恥ずかしいからやめて』と母親からよく恥ずかしい存在として言われた。比べられた。プライドが高いから、弱音を言えず、ストレスがたまる。弱音を言ったら壊れちゃうので、言ったらその時点で下に見られてる気がして、兄と比べられて、悔しかった。嫌な思

いばかりしてきた。一番大きかったのは自分を愛してくれていたおじいちゃん、おばあちゃんが死んだのが境目。

『よい子でいよう』『よい子でいよう』と思った。『ほめられたい』と思い続けた。勉強をやろうと思った。でも、お兄ちゃんの方ができる。今では父母とは話すけど、素の自分ではいられない。笑っているけど本当は笑っていない。

昔から本当は気付いてほしかった。当時、母は『何で』と聞いてくるけど、それだけ。ほっとかされた。私も無視していたからだけ。夜遊びして、泣いてばかり。母親に『あなたの前では笑えない』と言われたのも、すごいショックだった。いつも悪い子的に言われる。その時もお兄ちゃんと比較されるし、それでも『よい子でいよう、よい子でいよう』とした。自分に限界が来て疲れちゃう。父は1週間に1回しか帰らない。浮気をしていた。母は何も言わない。そんな家族を見てきたから『愛』とか何もかも信じられなかった。

ただ、私を除いて、母と父と兄は家族らしい家族だった。兄みたいに愛されたかった。誰でもいいから愛されたかった。居場所が欲しかった。友達がうらやましかった。家族がいて、好きな人がいて、居場所があって……。死にたかった。生きる意味が分からなかった。自分のイライラを誰にも話せず、いじめもした。学校では問題ばかり起こした。それでも物足りない。リストカット。生きていることを実感して、安心した。

そんな中で、部活動が私を必要としてくれた。しかし、椎間板ヘルニアになった。絶望。『医者なら治せよ』何回も泣き叫んだ。部活が自分の大切な居場所だったから。

それからは、今まで以上に私は壊れていった。酒、煙草、男遊びも激しくなった。親には『もうあんたなんかいらぬ』と言われたけど、涙も出ない。もう自分を傷つけるのに必死だった。誰かに弱音を吐いてすがりつきたかった。でも言えない。『かわいそう』と言われたくない。人

前で明るくし、『いつも笑ってて、悩みなさうだね』と言われた。そのたびに『悩まないよー』と笑って言う自分に嫌気がさした。本当に死のうと考えた。淋しくて、愛されたくて私はいろんな人に抱かれた。“チャライ女”“汚い”と皆からそう言われた。噂もたくさん流れた。何もない私にとって別に何を言われても、嫌とは思わなかったし、否定なんてしなかった。夜遊びを繰り返した。

ある日夜道を歩いていると黒いワゴン車に連れ込まれ、男3、4人にレイプされた。気持ち悪かった。汚い。その言葉だけが頭に流れた。1人で泣いた。誰にも言わなかった。言えなかった。どうせ私はこうなる運命なんだ。私は車道に飛び出した。でも死ななかった。薬を大量に飲んだ。でも死ななかった。

高2 終わり。同じ学年の知らない人に、放課後、誰もいないところに力づくで連れて行かれた。そこで、またレイプ。思いっきり突き放して逃げた。怖くて怖くて。でも親には言わなかった。泥だらけだったので、バイト先の店長に軽く話した。そこで着替えだけはした。(以下略) そんな中で高3の時、Eと出逢った。・・・それでは変わった。(以下省略)

レイプというすごい人権侵害を受けていても、仕方がない運命として受け止めてしまう。兄と比べられ、否定され続け、自分自身の安心や自信や自由がなくなってきた時に、人権感覚というか、すごい被害を受けたのだということすら自分の中で考えない、感じられない。「自分はこうなる運命だ」。そして母親にも言えない。私たちも、この子がこんな苦しみを背負っていたとは知りませんでした。

この子がなぜ、こんな文章を書けたのか。実は仲間を得た。苦しんでいる子どもたちが自分を取り戻すポイントはつながりの回復です。そして自分の苦しみを分かってくれる人との出会いです。実は同じように性非行に走っていたEという女の子と出会って、そして

男子も含めたグループを作った。これがこの子にとって自分を取り戻す最大のポイントでした。この子はそういう中で自分の居場所を取り戻し、倫理の授業で書きながら自分を見つめ、しっかりさせる。しっかりさせるためにまた書く。こういうことを繰り返して、この問題を乗り越え、今では、自分の体験を人前で話してもいいよ、性被害というものすごい被害も含めてしゃべっていいよと言うほど、自分の問題を見つめ直している。

この仲間との出会い。その背景には担任が集団を指導し、生徒同士がとても仲良くなっていった。個人を指導しつつ、集団を指導して、本当に対等の仲間、本当に真の友情、そして友と過ごしたこの時間が一生自分の支えになるような時にしていく。それが学校の役割ではないかと最近、特に思います。カウンセラーに言わせると、クラスの関係が改善すると、カウンセリングで何年もかけてやっと達するレベルにごく短期間で達するらしいです。子どもたちが今、どんなに苦しい思いを背負って高校に来ているか。その後、理不尽な社会に出てどんなつらい思いをするか。差別されるか。その時にそれを乗り越えていくポイントは、仲間と一緒に過ごしたあの時間、自分が輝いた時間。それがあれば生きていける。

特に今、大震災の中で、学校の役割が問われています。子どもたちが生きて学校に来た、もうそれだけで大人たちも子どもたちも喜び合い、そして、友達と共に生きている、この時間こそかけがえのないものだというのが、TVから伝わってきます。そして卒業の時に歌うのは君が代ではなく、ふるさとでした。「うさぎ追いし、かの山」を歌って卒業するのです。改めて友とのつながりがどれほど重要かということを考えさせられます。

## (5) 生きられない貧困の中で

もう1つ、貧困や非行についてお話ししま

す。非行生徒の被害にあった人もこの中にいるでしょう。そういう場合は、ヤンキーに恨みを持っていて当然です。ただ、教師としては、非行生徒たちも、別の側面で深い傷を負っていることを分からないといけない。

### 自己形成史（2005年度女子）

「私はきっと今まで苦労が多かった気がする。でもそのおかげで自分自身強くなれたし、しっかりしたと思う。そして、人の大切さ、ありがたみが分かったと思う。

1996年夏、私の両親が離婚しました。私の人生もお母さんのそれで大きく変わったと思う。当時まだ私は小学校3年生だったから、何が何だかよく分からなかったし、両親が離婚するというので、この先の生活がどう変わっていくかとか、むしろ明日から父と母と姉と家族4人で暮らしていけない悲しさもよく分からず、何も変わらない気がした。ただ、8歳上の姉がよく泣いていたから、私もそれなりに悲しくなったりはした。

両親の離婚を機に生活は一転した。まず小学校は違うところへ転校した。そこでは前の小学校みたいに、元気にはしゃげなくて友達も数少なかった。さびしかったけど、いつも今でも持っている家族4人で写っている私の七五三の時の写真を見ると元気が出た。友達ができにくく、数少なかった理由の1つとして、私にはお金がなかったことがまず1つだと思う。父がいたころの収入と比べて、3分の1以下で、私は月500円のおこづかいをもらっていた。でも、当時シール集めやプリクラ、そして、毎日みんなで寄る駄菓子屋等でとても500円じゃ足りなくて、よくふざけて『びんぼうだー』って馬鹿にされたりした。ふざけて言われてるのは分かっているけど、つらかった。なぜ私の家だけって、母を恨んだけど、自分より私にお金をかけている母に小さいながら分かっていたから、何も言えなかった。でも、みんなでシールなどを買いに行く時、私だけ誘われなくなった時はつらかつ

た。また、親あてのプリントなどを学校に提出する時、母の苗字と私の苗字は戸籍が違うので、当然違う。母と私の名前を書く欄があるプリントは大嫌いだった。なぜなら、1度母と私の苗字が違うことを馬鹿にされ、大笑いされたから。私はどうしていいか分からず、泣きたかったけど、ぐっところえてただ黙っていた。

なぜか、いつも母をうらんだ。家に帰って母に文句を言おうと思っても、家には母はいなく、いつも暗くなって夜8時9時に帰ってきた。家にいつも1人。さびしかった。悲しかった。つまんなかった。不安だった。だけど我慢した。その時、私はもし母に文句を言ったら、もっと家に帰ってこなくなるんじゃないかって思って、見捨てられる気がして、小学校時代はきっと母やみんなの前で良い子にした。誰からも嫌われなくなかった。

2000年に中学に入学してからは、もっと生活が厳しくなったけど、私もそれなりに理解していたし、母が楽になるように家事を手伝ったりした。友達もたくさんできた。でも、お金がないことには変わりはなく困った。友達に誘われて万引きをしたりした。最初は怖かったけど、もうどうでもよくなって、万引きをよくした。その時、自分って価値のない人間だと思っていたけど、お金がないんだから、仕方がないって、勝手に思って自分を納得させてた。

私の記憶の中で一番記憶に残っている出来事は、2001年夏に起きた。その日は土曜日で母が休みだった。私はどうしても髪をいじりたくて、母に1万円頂戴と言った。でも、母はお金がなくて、私に1万円くれなくて、そこで、日頃のお互いのストレスから大喧嘩になった。なぐりあったりした。私は最後に『死ね』って言った。ちょっと言ってから後悔した。母は近くにあったカッターを持って『じゃ、殺してよ』って泣きながら言った。私より母のほうが今の生活に限界だった。前より全然やせて、きっと1人で生活を背負って、限界だったみたいだった。

その日から私は、たくさん家事も頑張ったし、

節約も頑張っ、早く大人になって母を楽にさせたって思った。そして、悪いことをしなくなった。こんな私を高校まで行かせてくれた母にはとても感謝している。私は母を見て育ったからきつと強くなれたと思う。」

皆さんの出身高校では、母子家庭の友達はいくつか少ないかもしれない。先ほど言ったように偏差値の輪切りで、偏差値に正比例してというか反比例してというか、偏差値の低い学校ほどこういう経済的苦難を背負った家庭の子どもが集中しているからです。一番大変だった学校の私のクラスは、24人中20人が深刻な問題を抱えていました。2人が父親が暴力団員で、1人は船橋の暴力団の親分の子どもでした。父親の力を背景に暴力を振るい、あるいは暴走族、シンナー、性非行など20人もいるのです。そして、裏にはこういう問題がある。いじめなど加害行為、犯罪や非行を犯す子どもたちが、実は別な側面で被害者だという認識が重要なのです。

例えばこの子も、小学校の時は、必死によい子にする。それはお母さんに文句を言った日には、自分が見捨てられるかもしれない。お母さんが帰ってこなくなるかもしれない。だから、どんなに寂しくても不安でも退屈でも、我慢して生きるわけです。加えて、貧困や苗字が違うことへの差別や排除。そして中学で、おそらく同じような境遇の子どもたちと出会ったのでしょう。そこで楽にはなったけど、でも非行に走っていくわけです。その境目はどんな気持ちだったかということをお母さんは書いていました。気が付きませんか。非行に走った経験のある方なら分かるかもしれない。ここでこの子は、「どうにでもなれ」と書いています。「どうにでもなれ」というのは非行に走る境目の感情とっていいでしょう。言い替えると、自分なんかどんなに努力したって幸せなんか絶対なれないという絶望です。非行に走る境目の感情・気分とっていい

いでしょう。そして、ふてぶてしいように見える非行生徒たち、時には無表情で私たちに向かいかかってくるようなあの目をした子どもたち。しかし、生徒自身、それを肯定できているのかというと、そんなことはない。この子が書いているように、一方で「自分は何て価値のない人間だ」と思っています。もちろん非常に真面目だった子が、勉強や偏差値などで比べられて、苦しくなって期待が重くなって、もうやってられないというようになって切れて、非行に走っていくケースなどは、馬鹿になることで楽になることがあります。もちろんそういう側面はある。だけど、本当にそれで救われたかという、やはり救われないわけです。この非行に走っている子ども自身が悪戦苦闘しているわけです。

## (6) 生きる希望をつかむ

もう1人、読んでみましょう。やはり母子家庭の子です。念のために確認しておきますが、今、日本で母子家庭は貧困問題の焦点の1つです。というのは、社会の支えがあまりにもなさすぎるからです。離婚や死別したお母さんが就職しようとしても、まず仕事がありません。特別に技術があれば別でしょうが、普通はパートぐらいしかない。第一小さい子どもを抱えたお母さんを、理不尽なことです。企業が嫌がります。熱が出たとかで遅刻する、早く帰るなど効率が悪いと考えるからです。なおのことパートしかない。子どもが熱が出た時休んだり、早く帰れるのはパートしかないとお母さんの側からも考えます。時給750円だ、800円だ、深夜になると時給が多少いいから900円だ、1,000円だ。こういうことを2つ、3つ掛け持つわけです。例えば、朝はコンビニの弁当の工場に働いて、昼からはスーパーのレジ打ち、そして夕食どきだけ子どものために帰ってきて、夜8時からまた深夜まで仕事。寝る時間も本当に削って働いて



働いて、ぼろぼろになるまで子どもを支えている。そういうお母さんたちを支える福祉があまりにない。とは言え、わずかばかりありました。例えば児童扶養手当。これを今、構造改革、経済用語で言えば新自由主義改革の中で削り取っているわけです。お母さんたちの命綱を削り取る。どれほど母子家庭が困難に陥るかということです。あるいは生活保護を受けている母子家庭のお母さんたちの特別な困難のために母子加算、生活保護のお金に少し上乘せする部分を削りました。それは生活保護を受けていないお母さんが大変だから、それと合わせるべきだと。とんでもない。生活保護を受けたくても受けられないお母さんたちがものすごくいるわけです。そのために苦しい思いをしながら、そちらのほうに合わせるということで、生活保護の母子加算を切る。このようにして日本はただでさえ少ない母子家庭への社会の支えをますます削っているのです。本当に苦しい状況の中で生きているわけです。その中で親子関係が先ほどのように煮詰まっていくわけです。

近年、貧困問題は外に見えるようになってきました。例えば湯浅誠さんらが「年越し派遣村」などで明らかにした貧困がある。しかし、家庭の中に潜んでいる貧困は見えないのです。皆さんも「ワーキングプア」というNHKスペシャルを授業で観たかもしれない。しかし、あの働く貧困層の番組に出てくる家庭の特徴があります。家庭内が揉めていないんです。揉めていないからテレビに出られたのだと思います。現実が違う。現実、家庭の中でもものすごくぶつかっているわけです。「年越し派遣村」の人たちは、そうやって家庭に帰れない若者たちです。だから、派遣切りされたら、路上生活になるのです。

次も母子家庭の子のものを読みます。何がこの子を支えるかをよく聞いていてください。

## 「自分の人生」(2005年度女子)

「私の家は私が小さい頃、親が離婚し、母と2人で暮らしていた。母親はいつもいつも仕事で忙しくて、保育園では必ず迎えは最後になる。小学生になり、生活費がますますかかるようになると、親もいろいろな種類の仕事を始め、更に忙しい毎日になった。夜ご飯はほとんど毎日叔母さんが買ってきたお弁当を食べ、叔母さんが帰った後は1人でお風呂に入り、1人で寝た。

朝ご飯もろくに食べたことがなかった。寂しいと思ったこともあるが、自分のためだと思って我慢していた。そんな毎日を繰り返していたある日、私が小学校5年生ぐらいの時だった。母親が夜、珍しく早く帰ってきたと思うと、1人の男の人を連れてきた。その人は、それからほぼ毎日家に来るようになった。

その人と母親はとても仲が良さそうで、私はその光景がとても嫌で嫌でたまらなかった。そして私はよく家で暴れるようになった。ずっと今まで2人で暮らしてきたのに、母親がどんどん離れていくような気がして、本当に嫌だった。

ある日学校から家に帰ってくると、1通の手紙があった。手紙には母親とその人は婚姻届を出し、正式な夫婦になり、お腹の中には赤ちゃんがいると書いてあった。名字も変わるようになった。学校で先生はみんなに事情を説明し、それからみんなが違う名字で呼び始めた。私はそれがすごく嫌だった。プリントやテストにも当てつけのように前の名字を書き続けた。何ヶ月かたち、母親は赤ちゃんを産むために入院し、私は、産まれるまで一度も母親のところに行かなかった。赤ちゃんを産み、母親が赤ちゃんを抱いて帰ってきた。私はあえて何の声も掛けなかった。赤ちゃんにもまったく関心を寄せなかった。

けど、親が出掛ける時や用事がある時は、いやいや面倒をみる羽目になった。私は本当はその子が嫌いだった。でも、そんな私に笑い掛け、手を握ってくれたその赤ちゃんが少しずつかわいく見えてきた。

1年がたち、2人目の赤ちゃんが産まれた。私はまたかと思った。あつという間に私には2人の兄弟ができ、2人はかわいい。けど、親は私なんかそっちのけで2人の面倒を見るようになった。もう本当に私だけの母親ではなくなった。

私は今日まで一度も父親を、お父さんと呼んだことはない。親らしいことなんか何ひとつしてくれない。帰ってきてても2人には話し掛けるけど、私にはひと言も声を掛けない。家族で出掛ける時も、私はいつも1人で自ら家に残った。この家で自分1人が浮いた存在な気がしてたまらなかった。家にいると毎日毎日息が詰まった。けど、2人の兄弟は本当に私になついていて、家に帰ってくると、〇〇ちゃん、〇〇ちゃんと駆け寄ってきて、私は2人が本当にかわいくてかわいくて仕方がなかった。

そして月日がたち、3人で公園に行ったり、保育園に迎えに行ったり面倒をよく見るようになった。保育園に迎えに行くと、たくさん小さい子どもたちはみんな無邪気にかわいくて、自分は子どもが好きだということを実感した。そして将来は保育士になろうという夢ができた。きっと私以外にも、そういうつらい思いや寂しい思いをしてきた子どもたちがたくさんいる。私は将来保育士になり、そんな子どもたちを少しでも救ってあげようと思う。いろいろな経験をしてきた自分だからこそできる自信がある。だから、今となってはよい経験をしたと思っている。そして私が大人になり、いつか子どもができれば、絶対に幸せな子にしてあげようと思った。」

何がこの子を支えたか。嫌でたまらなかつた義理の父親と実の母親から産まれてきた兄弟たちの面倒を無理やり見させられた。しかし、思いがけずその兄弟たちが自分のことを慕ってくれた。自分を慕ってくれるその兄弟たちに、この子は救われています。つながりの回復は友達でなくてもいい。自分を本当に見つめ、必要としてくれる人と出会えるか。

これが生きている意味をつかむポイントかもしれない。思いがけず、嫌で嫌でたまらなかつた兄弟から慕われて、この子は保育士になるという夢をつかんでいきます。

もちろん自分の傷を本当に乗り越えるまでは悪戦苦闘の連続です。長い道のりかもしれない。特にあまり学力のない子ですから、社会学や教育学などと自分の問題をつなぎ合わせながら自分を客観化し、見つめ直していく、そして悪かつたのは自分ではなかつたのだという核心をつかんでいく学習をなかなかできなかったりする。その分遠回りするかもしれない。だけど、支えさえあれば、絶対にこの子は立ち上がっていきなすと思ひます。

## (7) 自分の現実を通して「社会」を捉える

最後に1つ読んで終わりにしたいと思ひます。この子も貧困な母子家庭です。そして、母子家庭でありながら、お母さんが、ガンで死んでしまひます。

### 「社会福祉」(2007年度男子)

「2000年、母親が検査入院することとなつた。当時、自分は小学4年生。両親はその時には、すでに離婚してひて、父親の行方はわからなくなつた。

検査入院は1泊だつたので、私は伯母宅に預けられた。そして、退院後はすぐに、長期入院が必要なことがわかつた。約3ヶ月間、私は、伯母宅から通うこととなり、ランドセルを背負つて、電車に乗り、学校に通つてひた。その後、母が亡くなる2005年の1月まで、入退院を繰り返すこととなる。最後はガンが転移してひて、体力的にも限界だつたらしく、手術を行うことができなかった。

2000年頃に、医療費の負担が増加することとなつた。(小泉改革の医療費の自己負担増のことを指すと思われる—前田—)私の家庭は貧しく、

明日食べるものでさえ用意できるかわからなかった。小学2年生の頃だったのだろうか。水道を止められた経験がある。ちょうど冬の時期で、駅までトイレをしに、母と共に掛けたことを、今でもよく覚えている。こんな状態だったから、母は、病院に行くことができなかった。自分の体が悪くなっていると自覚しても、私にご飯を食べさせるために、行くことができなかった。幸い、私は健康に恵まれ、全くといっていいほど大きな病氣はしたことがなく、私に対する医療費はかからなかった。

こんな状態の家族は、今の世の中、とても多くなっているのではないだろうか。だからこそ、医療費の負担が0割であることは、裕福な家庭ではどちらでも良いことかもしれないが、体験上、日本は医療費の負担を0割にするべきだ。そうしないと、私と同じ思いをしてしまう。もし、医療費負担が0割だったなら、助かったかもしれない、と。

この前の月曜、サラ金の講演をしていた（総合学習でサラ金問題の第一人者宇都宮弁護士を呼んで講演してもらった一前田）。この時、思い出したのが、父のことだ。詳しい話は聞かされてもないが、父は借金があったらしい。昔、母から聞いた話によると、『金を返せ』等と書かれた紙をアパートのドアの間にたくさん挟まっていたことがあるらしい。スーツ姿の男の人が来たのを私は覚えている。

2002年から、中学に入学し、野球部に入部する。その後、前の倫理で書いたと思うが、野球の上手、下手での優劣に悩んだ（野球部内で猛烈ないじめを受けていた一前田）。母親には、言えなかった。心配させたくなかったからだ。しかし、この中学の3年間で少し自分が強くなった気がする。

2005年4月、高校に入学した。もう、この頃からは、伯母や祖母と共に暮らしていて、祖母宅から学校に通っていた。でも、ここでも、人生に壁がくる。祖母が脳梗塞で倒れてしまったのだ。だから、身の回りのものは自分でそろえて

いこうと思い、アルバイトを始めた。部活と勉強との両立が大変だったが、今では良い経験をしたと思っている。

介護の費用も負担割合がある。私の現在の家族は、貧しくはない。だから、介護の費用も出せるし、施設だって利用することができるが、これが貧しい家庭だったら、どうなるだろうか。現代日本社会では、悲惨な結果になってしまっているケースが少なからずある。お金が無ければ、命を守れない。こんな社会を民主主義国家と言えるだろうか。憲法では「健康で文化的な最低限度の生活をする権利」が与えられているのに、これさえも実現できない。憲法がただの文になってしまうのではない。

私は、生まれてから現在まで、様々なことを体験してきた。私は、お金の面で、経験的な意味で、苦勞してきたことが多いかもしれない。今回、この自己形成史を書いていて、そう感じた。しかも、それは、国の問題、社会の問題に直面していることがわかった。これからも、自分の生活を見つめ、社会を見ていきたい。」

## （8）自分を縛っていたものを解放するための学習と自己表現を

このような貧困の中で、生活を見つめ、自分がつらかった原因を考えていけばいくほど、それは社会の問題とぶつかっていたことに気付きます。憲法25条は人間らしく生きる権利、生存権を保障しています。そして、その保障は国の義務、つまり、国の社会保障義務というわけです。そして、憲法の理念を彼は深く理解していくのです。しかし、今それがずたずたにされている。だから、1人ひとりの生きるということがこんなにつらくなっている。今、大震災の下で、全ての人に安心と生存権を保障することが問われています。そのためのお金は消費税率引き上げしかないのか。消費税率の引き上げをしたら、こういう家庭は真っ先につぶれてきます。絶対にやっ

てはいけないことです。では、どうしたらいいか。別な道があります。ぜひ研究してほしい。

子どもたちは今、一見すると、学ぶ意欲がないように見える。だけど、心の深いところに様々な問いが渦巻かないわけがない。皆さんも多分そうだと思います。自分の中の切実な問題と高校時代に学んだこととが結びつかなかったから、学校は、学ぶことは何てつまらないんだということになるのです。だけど、ひとたび自分が生きるということ、自分を縛っていたものを解き放つための学習とか自己表現と出会えた時に、学習や表現活動は自分にとって喜びにもなっていくと思います。ぜひ皆さんは子どもたちの生活や声から課題をつかんで、生活指導してもらいたい。そして子どもたちを通して、社会を見てほしい。そういう力量をつけてほしい。そして君たち自身が抱えている問題を深く見つめる、そして、それを社会的に語れるようになってほしい。その深さが大切です。そのためには社会科学や教育学をぜひ学んでもらいたい。

それから、教育実習に行ったら、君たちのように勉強しているわけではない生徒もたくさんいます。特に大変な学校に行ったら「何てやつらだ、信じられない」と思うかもしれません。でも、子どもたちを馬鹿にしたら、もうアウトです。子どもたちからそっぽを向かれます。逆襲されます。子どもたちの様々な問題や否定的な言動の奥に、これまで述べたような苦難の人生があるから、絶対に馬鹿にしてはいけません。では、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。